

Dākinivajrapañjara の註釈書々

その註釈者たち

—brog mi 翻訳官の Hevajra 相承系譜を

中心とした考察—

研究生 横山 裕明

【問題の所在】

『ヴァジュラパンジヤラ (『デルゲ東北 No.419)』の註釈書にはインドラブーティ著の『パンジカー (No.1194)』、クリシュナ著の『ムカバンダ (No.1195)』、マハーマティ著の『パンジカー (No.1196)』、著者不明 (以下X) の『ティツパティ』という四つが知られている。しかし、これらの註釈者たちは同名の者が多く存在し、よく分かっているのが現状である。そこで『ヴァジュラパンジヤラ』によって『ヘーヴァジュラ』を解釈する流儀を広めたと言われるドクミ翻訳官 (九九二—一〇七二) の『ヘーヴァジュラ』相承系譜を中心として考察をしていきたい。

【比較検証】

ドクミの『ヘーヴァジュラ』相承系譜は、プトウンの『聴聞録』(345) によれば、『ヴァジュラダラ→ヴァラスヤヴァジュラ→アナンガヴァジュラ→パドマヴァジュラ→インドラブーティ→ラクシュミンカラ→クリシュナーチャールヤ→ラムセベルジン→ガヤダラ→ドクミ』となっている。この系譜に従えば註釈者インドラブーティとクリ

シュナはドクミの祖師であり、同じ相承を受け継いできたことが分かる。また、それを支持する一例として、両者は註釈の中で第一章第一偈における各語を無礙・地・水・火・風という同様の解釈を示している。なお、マハーマティとXは同じ一偈目に対して法源・地・水・風・火という解釈を示している。この風と火の順番が一般的に四大の順番と異なっている点の特徴的な箇所といえる。また、法源と四大という構図はマンダラ観想法を意識していると考えられる。『タントラ部集成』第九十九番「ヘーヴァジュラ九尊マンダラ」の基本テキストであるフンドウプの『ヘーヴァジュラ観想法』の中でも法源の中において四大が混ぜられ一味となって楼閣となることが述べられている。なお、ドクミの直前すなわち直接の師として書かれているガヤダラ (九九四—一〇四三) は、『ヴァジュラパンジヤラ』に加えてクリシュナ著『ムカバンダ』とマハーマティ著『パンジカー』のチベット語翻訳をおこなった人物である。

【まとめ】

以上をまとめると、インドラブーティとクリシュナは同じ相承の流れの中におり、インドラブーティの方が先に相承を受けた人物である。また、マハーマティとクリシュナはガヤダラ以前の人物であることが分かった。なお、Xは「第四灌頂」「因と果のヘーヴァジュラ」といった『ヘーヴァジュラ (二儀軌)』の要語を多く用いている。これは

ドクミの流れを受けた人物が『ヴァジュラパンジャラ』の理解に『ヘーヴァジュラ』を意識していた結果であるとも考えられ、Xがドクミ以降の人物である可能性を指摘することができる。